鷲湖仙人

国枝史郎

一

時は春、梅の盛り、所は信州諏訪湖畔。
そこに一軒の掛茶屋があった。
ヌッと這入って来た武士(さむらい)がある。野袴に深編笠、金銀こしらえの立派な大小、グイと鉄扇を握っている、足の配り、体のこなし、将しく武道では入神者。
「よい天気だな、茶を所望する」
トンと腰を置台へかけた。物やわらかい声の中に、凛として犯しがたい所がある。万事物腰鷹揚である。立派な身分に相違ない。大旗本の遊山旅、そんなよう

なところがある。
「へい、これはいらっしゃいまし」
茶店の婆さんは頭を下げた。で、恭しく渋茶を出した。
ゆっくりと取り上げて笠の中、しずかに喉をうるおしたが、その手の白さ、滑らかさ、婦人の繊手さながらである。
茶を呑み乍ら其の侍、湖水の景色を眺めるらしい。
周囲四里とは現代のこと、慶安年間の諏訪の湖水は、もっと広かったに違いない。
信濃なる衣ヶ崎に来てみれば

富士の上漕ぐあまの釣船

西行法師の歌だというが、決して決してそんな事は無い。歌聖西行法師たるもの、こんなつまらない類型的の歌を、なんで臆面も無く読むものか。

が、併し、衣ヶ崎は諏訪湖中での絶景である。富士が逆さにうつヽるのである。その上を釣船が漕ぐのである。その衣ヶ崎が正面に見えた。

水に突き出た高島城、四万石の小大名ながら、諏訪家は仲々の家柄であった。石垣が湖面にうつヽっている。

「うむ、いいな、よい景色だ」

武士は惚々と眺め入った。時刻は真昼春日喜々、

陽炎（かげろう）が雪消の地面から立ち、チラチラ光って空へ上る。だが山々は真白である。ほんの手近の所まで、雪がつもっているのである。

思い出す木曽や四月の桜狩。

これは所謂翁の句だ。翁の句としては旨くない。だが信州の木曽なるものが、いかに寒いかということが、此一句で例証はされる。昔の四月は今の五月、五月に桜狩があるのだとすると、これは確に寒い筈だ。ところで諏訪も同じである。矢張り木曽ぐらい寒いのである。

侍は婆さんへ話しかけた。

「話はないかな？　面白い話は？」
「へえへえ」
と云ったが茶店の婆さん、相手があまり立派なので、
先刻からすっかり萎縮して了って、ロクに返事も出来
ないのであった。
「へいへいさようでございますな。……これと云って
変った話も……」
「無いことはあるまい。ある筈だ。……それ評判の鵞
湖仙人の話……」
こう云った時、手近の所で、ドボーンという水音が
した。

侍は其方へ眼をやった。

と、眼下の湖水の中に、老人が一人立泳ぎをしていた。

寒い季節の水泳！　まあこれは可いとしても、その老人が打ち見た所、八十か九十か見当が付かない。そんな老齢な老人が、泳いでいるに至っては、鳥渡びっくりせざるを得ない。

「信州人は我慢強いというが、いや何うも実に偉いものだ」

侍は感心してじっと見入った。

ところが老人の泳ぎ方であるが、洵（まこと）に奇態なもの

であった。
　水府流にしても小堀流にしても、一伝流にしても大和流にしても、立泳ぎといえば大方は、乳から上を出すものである。それ以上は出せないものである。にも関らず老人は腰から上を出していた。で、まるで水の上を、歩いているように見えるのである。
　侍はホトホト感心した。
「だが一体何流かしらん？　こんな泳ぎ方ははじめてだ、まことに以て珍らしい」
　だが侍の驚きは、間も無く一層度を加えた。と云うのは老人が、愈々でて愈々珍らしい、［＃「、」は底本で

は「。」不思議な泳ぎ方をしたからであった。

老人はズンズン泳いで行った。湖心に進むに従って、形が小さくなる筈を、反対にダンダン大きくなった。しかし是は当然であった。老人は泳ぐに従って、益々体を水から抜き出し、二町あまりも行った頃には、文字通り水上へ立って了ったのである。

二

これでは水を泳ぐのではない。水の上を辷っているのだ。

スーッと行ってはクルリと振返り、スーッと行ってはクルリと振返る。

侍は腕を組んで考え込んだ。

「むーー」と侍は唸り出して了った。軈て呟いた。

「南宗流乾術第一(なんそうりゅうけんじゅつだい)巻(まき)九重天(ちょうてん)の左行篇(さぎょうへん)だ！　あの老人こそ鷺湖仙人だ！　……今に消えるに相違無い！」

はたしてパッと水煙が上った。同時に湖上の老人の姿が、煙のように消えて了った。

見抜いた武士も只者では無い。

むべなる哉この侍は、由井民部介橘正雪。

南宗流乾術第一巻九重天の左行篇に就いて、説明の筆を揮うことにする。

これは妖術の流儀なのである。

日本の古代の文明が、大方支那から来たように、この妖術も支那が本家だ。南宗画は本来禅から出たもので、形式よりも精神を主とし、慧能流派の称である。ところが妖術の南宗派は、禅から出ずに道教から出た。即ち老子が祖師なのである。道教の根本の目的といえば、長寿と幸福の二つである。この二つを得るためには、代々の道教家が苦心したものだ。或者は神丹を製造して、それを飲んで長命せんとし、或者は陰陽の調

和を計り、矢張り寿命を延ばそうとした。幸福を得るには黄金が必要だ。それで或者は練金術［＃「練金術」はママ］をやって、うんと黄金を儲けようとした。
神仙説を産んだのも、矢張り長寿と幸福との為めだ。だが、併し、妖術の元は、幸福を得るというよりも、長寿を得ると云う方に、重きを置いていたらしい。ところで妖術の著書はと云えば、枹木子を以て根元とする。そこで筆は必然的に、枹木子に就いて揮わなければならない。
ところが洵に残念なことには、枹木子の著者は不明なのである。これほど素晴らしい本の著者が、不明と

いうのは不思議であるが、しかし一方から見る時は、不明の方が本当かもしれない。屹度神仙が作ったんだろう、と云ってた方が勿体が付いて、却って有難くもなるのだから、尤も一説による時は、葛洪（かっこう）という人の著書だそうだ。

ところで枹木子は内篇二十篇外篇五十二篇という大部の本だ。詳しい紹介は他日を待ってすることにしよう。

枹木子は妖術の根本書で、非常に非常に可い本である！　ただ是だけでいいでは無いか。

だが、本当を云う時は、この枹木子は妖術書では無

くて、仙術の本という可きである。

で、真実の妖術書といえば、その枹木子の精粋を取り、更に他方面の説術を加味した「南宗派乾流」という本なのである。

三

その有名な妖術書の「南宗派乾流」は足利時代に、第一巻九重天だけ、日本へ渡って来たのである。第一巻九重篇だけでも、どうしてどうして素晴らしいもので、それを体得しさえしたら、どんな事でも出来るの

だそうだ。

それを何うして手に入れたものか、鷲湖仙人という老人が、何時の間にか手に入れて、ちゃんと蔵っているのであった。

それを何うして嗅ぎ付けたものか、由井正雪が嗅ぎ付けて、それを仙人から奪い取ろうと、遥々江戸から来たのであった。

物語は三日経過する。

此処は天竜の上流である。

一宇の宏大な屋敷がある。

薬草の匂いがプンプンする。花が爛漫と咲いている。鵞湖仙人の屋敷である。

その仙人の屋敷の附近へ、一人の侍がやって来た。

他ならぬ由井正雪である。

先ず立って見廻わした。

「ううむ、流石は鵞湖仙人、屋敷の構えに隙が無い。……戌亥にあたって丘があり、辰巳に向かって池がある。それが屋敷を夾んでいる。福徳遠方より来たるの相だ。即ち東南には運気を起し、西北には黄金の礎（いしずえ）を据える。……真南に流水真西に砂道。……高名栄誉に達するの姿だ。……坤（ひつじさる）巽（たつみ）に竹林家を守り、乾（いぬい）

艮（うしとら）に岡山屋敷に備う。これ陰陽和合の証だ。……ひとつ間取りを見てやろう」

で、正雪は丘へ上った。

「ははあ、八九の間取りだな。……財集まり福来たり、一族和合延命という図だ。……ええと此方が八一の間取り。……土金相兼という吉相だ。……さて此方は一七の間取り。僧道ならば僧正まで進む。……それから此方が八九の間取り。……仁義を弁え忠孝を竭（つく）す。子孫永久繁昌と来たな。……それから此方は七九の間取り。……うん、そうか、あの下に、金銀が蓄えてあると見える。金気が欝々と立っている。……さて、あい

つが九六の間取りで庭に明水の井戸がある。薬を製する霊水でもあろう。六四の間取りがあそこにある。……公事訴訟の憂いが無い。……戌亥に二棟の土蔵がある。……即ち万代不易の相だ。……戌にもう一つの井戸がある。……一家無病息災と来たな。……グルリと土塀で囲まれている。……厩（うまや）が二棟立っている。……母屋の庭は薬草園だ。……」

由井正雪は感心した。

正雪は一代の反抗児、十能六芸武芸十八番、天文地文人相家相、あらゆる知識に達していたので、曾て驚いたことが無い。

それが驚いたというのだから、よくよくのことに相違無い。

「さて、これから何うしたものだ」

彼は思案に打ち沈んだ。

「路に迷った旅人だと、嘘を云って乗り込もうか。いやいや看破かれるに違いない。では正直に打ち明けて「術書」の譲りを受けようか。なかなか譲ってはくれないだろう。……うん、そうだ。忍び込んでやろう。俺は忍術葉迦流では、これでも一流の境にある。目付けられたら夫れまでだ。叩っ切って了えばいい。旨く術書が探ぐりあたれば、そのまま持って逃げる迄だ。

よし、今夜忍び込んでやろう」

四

忍術も支那から来たものである。六門遁甲が根本である。「武備志」遁用術も其一つだ。

しかし忍術は日本に於て、支那以上に発達した。それは日本人が体が小さく、敏捷であったが為である。

忍術の根本は五遁にある。即ち水火木金土だ。

ところで葉迦流は水遁を主とし、葉迦良門の開いたもので、上杉謙信の家臣である。

「滴水を以て基となす」

こう極意書に記されてある。

一滴の雨滴が地面に落ちる。それをピョンと飛び越すのである。二滴の雨滴が地面へ落ちる。それを復ピョンと飛び越すのである。

雨滴はだんだん量を増す。地面の水域が広くなる。それをピョンピョン飛び越すのである。しまいには池となり沼となる。もう其頃には人間の方も、それを平気で飛び越す程の力量が備わっているのである。

これ葉迦流の跳躍術の一つ。

その他水を利用して、さまざまの忍びを行うのが、葉迦流忍術の目的なのである。世の勝れた忍術家なるものは、勿論、科学者ではあったけれど、更に夫れ以上忍術家は、心霊科学で云う所の、「霊媒（ミイジャム）」であったのであった。

霊媒とは霊魂の媒介者である。

人間は現在活きている。だが人間はいずれ死ぬ。さて死んだら何うなるか？　勿論肉体は腐って了う。しかし霊魂は存在する。これ霊魂不滅説だ。その霊魂は何処にいるか？　霊魂の世界に住んでいる！　そうして夫れ等の霊魂は、活きている人間と通信したがる。

しかし普通の人間とは、不幸にも絶体に通信が出来ない。そこで特別の器能を備えた、――霊魂の言葉が解る人間――即ち霊媒を要求する。

霊媒とは霊魂のどんな言葉をでも、解し得る所の人間なのである。

のみならず勝れた人間になれば、草木山川の言葉をも――宇宙の生物無生物の言葉。それをさえ知ることが出来るのである。

そういう人間は此浮世に、極わめて稀に存在する。その中の或者が夫れを利用し、勝れた忍術家となったのである。

由井正雪は丘を下り、どこへとも無く行って了った。
こうして深夜五更となった。
すべて忍術家というものは、五更と三更とを選ぶものである。
鷲湖仙人の大館は森閑として静まっていた。
月も無ければ星も無い、どんよりと曇った夜であった。
と、竹藪から竹の折れる、ピシピシいう音が聞えて来た、風も無いのに竹が折れる、不思議と耳を傾けるのが、普通の人の情である。しかし、そっちへ耳傾けたが最後、心が一方へ偏して了う。偏すれば他方ががら

ら空きとなる、そこへ付け入るのが忍術の手だ。
竹の折れる音は間も無く止んだ。後は寂然と音も無い。
鷲湖仙人はどうしているだろう？　由井正雪は何処にいるだろう？　勿論竹を折ったのは、正雪の所業に相違無い。
と、厩で馬が嘶いた。さも悲しそうな嘶き声である。だが夫れも間も無く止んだ。そうして後は森閑と、何んの物音も聞えなかった。
屋敷は益々しずまり返り、人の居るような気勢も無い。

と、二階の窓が開き、ポッと其処から光が射した。そこから一人の若い女が、夜目にも美しい顔を出した。どうやら何かを見ているらしい。仙人の屋敷に美女がいる？　少し不自然と云わざるを得ない。

と、天竜の川の上に、ポッツリと青い光が見えた。それがユラユラと左右に揺れた。そっくり其の儘人魂である。

するとと窓から覗いていた、若い女が咽ぶように叫んだ。

「おお幽霊船！　幽霊船！」

五

「幽霊船だって？　何んの事だ？」

こう呟いたのは正雪であった。

彼は此時厩(うまや)の背後、竹藪の中に隠れていた。

で、キラリと眼を返すと、天竜川の方を隙かしてみた。

いかにも此奴は幽霊船だ。人魂のような青い火が、フラフラ宙に浮いている。……提灯で無し、篝火で無し龕燈で無く松火(たいまつ)で無い。得体の知れない火であった。

どうやら帆柱のてっぺんに、その光物は在るらしい。

正雪は何時迄も見詰めていた。次第に闇に慣れて来た。幽霊船の船体が、朧気ながらも見えて来た。

天竜川は黒かった。闇に鎖ざされて黒いのである。時々パッパッと白い物が見えた。岩にぶつかる浪の穂だ。その真黒の水の上に、巨大な船が浮かんでいた。それは将しく軍船（いくさぶね）であった。二本の帆柱、船首（へさき）の戦楼（やぐら）矢狭間が諸所に設けられている。

そうして戦楼にも甲板にも、無数の人間が蠢いている。人魂のような青い火が、船を朦朧と照している。

人々は甲冑を鎧っている。手に手に討物を持っている。槍、薙刀、楯、弓矢。……

おお然うして夫れ等の人は、鷲湖仙人の屋敷の方へ、挙って指を指している。何やら罵っているらしい。しかし話声は聞えない。

彼等はみんな痩せていた。

と、続々甲板から、水の中に飛び込んだ。十人、二十人、三十人。……しかも彼等は溺れなかった。彼等は水の上に立っていた。

飛ぶように水面を走り乍ら、続々と岸へ上って来た。彼等は岸へ勢揃いした。それから颯っと走り出した。

鷲湖仙人の屋敷の方へ！

近寄るままによく見れば、彼等はいずれも骸骨で

あった。眼のある辺には穴があり、鼻のある辺には穴があり、口のある辺には歯ばかりが、数十本ズラリと並んでいた。

甲冑がサクサク触れ合った。骨と骨とがキチキチと鳴った。

竹藪の方へ走って来る。

流石の正雪もウーンと唸った。すっかり度胆を抜かれたのである。

彼は地面へ腹這いになった。

サーッと彼等は走って来た。彼等の或者は正雪の背中を、土足のままで踏んで通った。しかし少しの重量

も無い。彼等には重量が無いらしい。大勢通るにもかかわらず、竹藪はそよとの音も立て無い。一片の葉さえ戦（そよ）がない。彼等には形さえ無いと見える。

いやいや併しハッキリと、恐ろしい形が見えるでは無いか！　甲冑をよそった骸骨の形が！　そうだ、それは確かに見える！　だが夫れは見えるばかりだ。物質としての容積を、只彼等は持っていないのだ！

即ち彼等は幽霊なのだ！

幽霊船の幽霊武者！　そいつが仙人の屋敷を目掛け、まっしぐらに走って行くのである。

物凄い光景と云わざるを得ない。

幽霊武者は一団となり、土塀の裾へ集まった。と、彼等は土塀をくぐり、サッと屋敷内へ乱入した。勿論土塀には穴が無い。それにもかかわらず潜ったのだ。

湧き起ったのは女の悲鳴！

「ヒーッ」という魂消える声！　つづいて老人の呶鳴り声！　鷲湖仙人の声らしい。討物の音、倒れる音、ワーッという鬨声！　ガラガラと物の崩れる音。

「お爺様！　お爺様！　お爺様！」

「おお娘、しっかりしろ！」

ドッと笑う大勢の声。

「ヒーッ」と復も女の悲鳴。
意外！　歌声が湧き起った。

武士のあわれなる
あわれなる武士の将
霊こそは悲しけれ
うずもれしその柩
在りし頃たたかいぬ
いまは無し古骨の地
下ざまの愚なる
つつしめよ。おお必ず
不二の山しらたえや

きよらとも、あわれ浄（きよ）し
不二の山しらたえや
しらたえや、むべも可
建てしいさおし。

訳のわからない歌であった。しかし其節は悲し気であった。くり返しくり返し歌う声がした。そうして歌い振りに抑揚があった。或所は力を入れ或所は力を抜いた。

由井正雪は腹這ったまま、じっと歌声に耳を澄ました。

くり返しくり返し聞える歌！

深夜である。
山中である。
その歌声の物凄さ！

六

復も土塀から甲冑武者が、恰も大水が溢れるように、ムクムクムクムクムクと現れ出た。
彼等は何物かを担いでいた。
数人が頭上に担いでいた。女である！　女の死骸だ！　窓から顔を差し出して「幽霊船！」と叫んだ女

だ！　その死骸を担いでいる。

　走る走る甲冑武者が走る。

　竹藪を通って天竜の方へ！

　或者は正雪の頭を踏んだ。或者は彼の足を踏んだ。そうして或者は手を踏んだ。矢張り重量は感じない。

　彼等は川の方へ走って行った。そうして水面を辷るように歩き、船の上へよじ上った。

　と、船が動き出した。天竜川を上るのである。人魂のような光物が、ユラユラと宙でゆらめいた。上流へ上流へと上って行く。

　立ち上った正雪は腕を組んだ。

「深い意味があるに相違無い。彼奴等の歌ったあの歌にはな。……今夜の忍び込みはもう止めだ。……ひとつ手段を変えることにしよう」

彼は竹藪からするすると出た。そうして何処ともなく立ち去った。

その翌朝のことである。

鷲湖仙人の屋敷を目掛け、一人の武士が歩いて来た。

余人ならぬ由井正雪。

玄関へ立つと案内を乞うた。

「頼もう」と武張った声である。

と、しとやかな畳障り、玄関の障子がスィーと開いた。婦人がつつましく坐っている。
それを見た正雪は「あっ」と云った。
これは驚くのが、尤である。幽霊武者に担がれて行った、昨夜の娘が坐っているのだ。
「どちらからお越しでございます?」
その婦人は朗かに云った。幽霊では無い、死骸では無い。将しく息のある人間だ。妙齢十八、九の美女である。ちゃんと三指を突いている。
「驚いたなあ」と心の中。正雪すっかり胆を潰した。
しかし態度には現さず「拙者こと江戸の浪人、由井正

雪と申す者、是非ご老人にお目にかかり度く、まかり出でましてございます。この段お取次ぎ下さいますよう」

「暫くお待ちを」と娘は云った。それからシトシトと奥へ這入った。間違いは無い足がある。どう睨んでも幽霊では無い。

正雪、腕を組んで考え込んだ。

そこへ娘が引き返して来た。

「お目にかかるそうでございます。どうぞお通り下さいますよう」

で、正雪は玄関を上った。

通されたのは奇妙な部屋だ。三間四方の真っ四角の部屋、襖も無ければ障子も無い。窓も無ければ出入口も無い。

「はてな」と正雪は復考えた。「俺はたしかに案内されて、たった今此部屋へ這入った筈だ。それだのに一つの出入口も無い。一体どこから這入ったのだろう？」

どうにも彼には解らなかった。四方同じ肉色の壁で、それが変にブヨブヨしている。そうして無数に皺がある。その皺が絶えず動いている。延びたかと思うと縮むのである。壁ばかりでは無い。天井も然うだ。天井

ばかりでは無い床も然うだ。現在坐っている部屋の板敷が、延びたり縮んだりするのである。床の間も無ければ違い棚も無い。一切装飾が無いのである。
気味が悪くて仕方が無かった。
「ううむ、こいつは遣られたかな」
正雪は心を落ち着けようとした。彼は眼を据えて板敷を見た。と不思議な筋があった。その筋は三本あった。部屋の一方の片隅から、斜めに部屋を貫いていた。
それを見た正雪はブルブルと顫えた。しかし恐怖の顫えでは無く、それは怒りの顫えであった。
「巽から始まった天地人の筋、一つは坤兌(こんだ)の間を走り、

一つは乾に向かっている。最下の筋は坎を貫く！」彼はバリバリと歯を噛んだ。
矢庭に抜いた腰の小柄、ブツーリ突いたは板敷の真中！　途端に「痛い！」と云う声がした。
その瞬間に正雪は、もんどり打って投げ出された。飛び起きた時には其部屋は無く、全く別の部屋があった。
　違い棚もあれば床の間もある。床の間には寒椿が活けてある。棚の上には香爐があり、縷々（るる）として煙は立っている。襖もあれば畳もある。普通の立派な座敷であった。

床の間を背にして坐っているのは、他でも無い鵞湖仙人、渋面を作って右の掌を、紙でしっかり抑えている。そこから流れるのは血であった。

七

「ひどいことをなさる、由井正雪殿」
老人は相手を怨むように云った。
「お互いでござるよ、鵞湖仙人殿」
正雪は哄然と一笑したが「いかがでござる。傷は深いかな?」

「深くは無いが、ちょっと痛い」
「アッハハハ、お気の毒だな。……手中に握った天罰でござる」
「でも宜く心が付かれたな」
「天地人三才の筋からでござる」
「大概な者には解らぬ筈だが」
「なにさ、手相さえ心得て居れば、あんなことぐらいは誰にでも解る。……が、あれは何術でござるな？」
「さよう、あれは、十宮伝」
「南宗派乾流九重天、第一巻の其中に、矢張りあるのでござろうな？」由井正雪は鎌をかけた。

すると老人はジロリと見たが、

「さあ何うだかな、わしは知らぬ」俄(にわか)に用心したものである。「それは然うと正雪殿、昨日［＃「昨日」は底本では「明日」］は湖畔でお目にかかったな」

「え、それではご存じか」正雪ちょっとドキリとした。

「それに昨夜はご苦労だった。折竹探法、嘶馬(せきば)探法、いろいろ忍術をおやりのようだが、とうとう諦めて帰られたな。どうやら葉迦流をお学びと見える、が、まだまだ少しお若い。あれでは固めは破れぬよ」

「畜生」と正雪は腹の中「爺め、何んでも知っていやがる」しかし彼は屈しなかった。

彼は一膝グイと進めた。
「が、流石のご老人も、幽霊船にはお困りのようだな」
「さて、そいつだ」と老人は、繃帯した右手を膝へ置いたが「余人ならぬ正雪殿だ、真実の所をお話しするが、仰せの通り、あれには参った」
「ご老人ほどの方術家にも、どうにもならぬと見えますな」
「天人にも五衰あり、仙人にも七難がござる。……死霊だけには手が出ない」
「歌に就いてのお考えは？」
「え、歌だって？　なんの歌かな？」

「彼奴等の歌ったあの歌でござる」

「あああれか、考えて見た。……が、どうも解らない」

「ところが拙者には解って居る」

「ふうん、さようかな、その意味は？」

「不可ない不可ない」と手を振った。「そう安くは明されぬて」

「さようか、それでは聞かぬ迄だ」老人、不快そうに横を向いた。

「ところで一つお聞きしたい」正雪は老人を見詰め乍ら「あのご婦人はお娘御かな？」

「さようでござる、孫娘で」

「どうして活きて戻られたな？」

「いや夫れは毎晩でござる。毎晩彼奴等が征めて来ては、あの娘を死骸とし、船へ運んで虐んだ後、活かして返してよこすのでござる。……可哀そうなのは孫娘でござる。だんだん衰弱いたしてな、……つまりわしには祟れぬので、そこで弱い娘に祟り、わしを間接に苦しめるのでござるよ」

「老人、何か過去に於いて殺生なことはなされぬかな？」

「いいや、断じて」と老人は云った。「わしはこれでも方術家、一切罪悪は犯していませぬ」

「今後はなんとなされますな？」
「手が出ませぬ。捨てて置きます」
「お娘御のお命は？」
「可哀そうに、死にましょう」
「拙者、退治て進ぜよう」正雪は復も膝を進めた。
「いかがでござろう、褒美として、秘巻はお譲り下さるまいか」
老人はじっと考え込んだ。それから徐ろに口をひらいた。
「最早秘巻此わしには、殆ど必要が無いのでござる。何故と云うに既にわしは、秘巻の意味を知り尽したか

らで、そこで他人に譲りたく、人材を求めたのでござる。その結果四人を目付けました。第一が他ならぬご貴殿でござる。第二が山鹿素行殿、第三が熊沢蕃山殿、第四が保科正之侯。……で、湖畔で貴殿に会いその人物を験めそうものと、例の立泳ぎお目にかけました。が、貴殿には残念にも、心に不軌を蔵して居られる。天下を乱すに相違無い。然るに南宗派乾流は、そういう人物には有害なのでござる。で、貴殿には譲りたくござらぬ。とは云え悪霊を退治して、娘をお助け下さるとあっては、矢張り譲らねばなりますまい。よろしうござる、お譲りしましょう」

つと老人は立ち上り、隣の部屋へ這入って行った。持って来たのは一巻の巻物、恭しく額に押しあてたがやがて正雪の前へ置いた。

「術譲り！　襟を正されい」

正雪はピタリと襟を正した。

「さて、秘巻はお譲り致した。……悪霊退散の方法はな？」

八

「不浄場をお取り壊しなさるよう」

これが正雪の言葉であった。既に秘巻を譲られたからは、老人は彼に執り師匠であった。そこで言葉を慇懃にした。

「先生は博学でございます。それが尠(すくな)くも今度の事件では、失敗の基でございました。何故と申しますに先生には、その博学にとらわれて、つまらない彼等の歌の意味を、むずかしくお考えになりました。そのため難解に墜落ました。彼等の歌には意味は無く、文字に意味があったのでございます。既ち初の文句では、その頭にある「武」という文字に、意味があったのでございます。そうして其の次の文句ではその最後にあ

る「将」という文字に、意味があったのでございます。そうして三番目の文句では、矢張り頭にある「霊」という文字に意味があったのでございます。そうして四番目の文句では、又最後の「柩」という文字に、意味があったのでございます、このようにして頭と尻との、各一字ずつの文字を取り、そのまま順序よく並べますと、次のような一連の言葉となります。

武将霊柩在地下

必不浄不可建

武将の霊柩地下に在り、必ず不浄を建つ可からず。

——このようになるのでございます。ところで何うし

てこの私が、それに気が付いたかと申しますに、彼等が歌をうたう時、頭と尻とへ特別に、力を籠めるからでございました。……で、恐らくお屋敷内の便所の下に古武将の柩が、埋めてあるのでございましょう。その上へ便所が立ちましたので、その霊魂が憤慨し、仇をしたものと存ぜられます」

そこで老人と正雪とは、急いで便所を取り壊し、その地の下を掘って見た。果たして一個の霊柩があり、甲冑を鎧った骸骨が、その附近に散在していた。

底本：「妖異全集」桃源社
１９７５（昭和50）年９月25日発行
初出：「ポケット」
１９２６（大正15）年３月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
※底本には以下に挙げるように誤植が疑われる箇所がありましたが、正しい形を判定することに困難を感じたので底本通りとし、ママ注記を付けました。
○練金術：「錬金術」の誤記か。
入力：阿和泉拓

校正：門田裕志、小林繁雄
２００４年12月13日作成